
親鳥と子狼

日和

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

親鳥と子狼

【Nコード】

N9384L

【作者名】

日和

【あらすじ】

『精霊の守り人』二次創作。旅立つバルサを見送るタンダ。

いつも突然に旅立ってしまう幼馴染は、気まぐれに訪れる野生動物より性質が悪い―

タンダはせっせと荷支度をする背中を見て常にそう思う。

野生動物は良い。

完全に人に懷かず、人間との距離の取り方もよく理解している。だが幼馴染の女は違う。

やっと帰って来たと心穏やかになるのはほんの一瞬。

その直後、旅立ちは何時なのかという嫌な寂寥感に襲われる。

以前それを正直に打ち明けたことがあった。

その時はタンダも不安でならなかったのだ。

彼女が自分の知らない所で死に絶え、一生会えなくなるのではないかと。

しかしそんな暗い思考は明るい笑い声で返された。

『私は狼以上に獰猛で非情な動物だからね。そんな簡単に死にはしないよ』

猛然と見据える瞳は飢えを凌ぐ為の狩りではなく、もっと奥深い修羅場に身を投じるため―寧ろそうすることでしか生きられないという焰がちらついていた。

タンダはその遣り取りをふと思い出し胸がぎゅっと絞め付けられた。

「さて、じゃあ行くよ」

器用に短槍で荷物を持ち上げ戸口へ向かう。

押し狂いそうになる気持ちに潰されないよう誤魔化すかの如く『気をつけて行って来いよ』と送り出すのは強がりでも何でもなかった。

ただそう言えば必ず帰ってくる、大丈夫だと思える願掛け、ようは勝手な自己満足。

女は器用にひょいと馬にまたがると感情の読み取れない眼でタンダを見つめた。

今までこんな風に別れを惜しむように立ち止まることなどなかったのに・・・

タンダは深い瞳の中に自分の姿を見つけてふいに泣きそうになった。

見つめる先に潜む心底に何が沈んでいるのかは分からない。

だがただの勘でも言葉に表せない想いが滲んでいるのが伝わる。

それは自分の姿を守るような、力強い気持ちだった。

鼻の奥がつんと痛み、呼吸を忘れる程の幸せをタンダは感じた。

泣きそうになっている幼馴染の姿を見て微笑み「ねえ、タンダ」と呟く。

じっと見つめていた瞳がふと遠くへ向けられる。

「あんた前に自分を親鳥のようだと言ったね、子が旅立つのを見送るしかないって。私はあの時、自分を狼に例えたけど・・・何も非情ってだけで言っただんじやないよ」

視線が再び戻されお互いの姿を見出した時、灯る暗焰は見つけられなかった。

「狼は家族のために狩りをして罫ひげに戻るだろう。ここに帰る度、その姿が自分に重なってしまふんだよ」

狩りは狩りでも本質が違う、捕食のため生きるため。

だがタンダにはその言葉だけで十分だった。

それ以上は望んではいけない。

「ああ、分かっている。狼は強いからな、へまして狩られるなよ」言葉での返事はなかった。

だが小さく頷き遠くを見据えて歩み出す。

寂しい親鳥は狼の背中が見えなくなっただ後、何度も言葉を噛み締

める。

進み行く道の先に『死』という名の獣が現れないことを願って。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9384/>

親鳥と子狼

2011年2月26日07時30分発行